

国宝源氏物語絵巻に関する一考察

——「横笛」における襖障子の機能について——

横 島 菜 穂 子

序

源氏物語は、王朝文学の代表作である。この物語を題材にした源氏絵は、物語成立直後、つまり十一世紀にはすでに制作されていたと考えられているが、その後も各時代を通じて描き継がれ、原作の物語と共に、文学や絵画に少なからず影響を与えてきた。今日に至っても、王朝の美意識の象徴として、人々に訴えかけてくる。

国宝となつている源氏物語絵巻（以後、国宝源氏物語絵巻と呼ぶことにする）は、現存する最古の源氏絵であるばかりか、物語への理解の深さや絵画としての完成度において抜きん出た傑作である。制作年代は画風、書風から十二世紀前半と考えられている。壮大な物語をこれほど見事な絵画表現に高め得たことは、歴史上の喜ばしい奇跡とさえ思われるが、その理由のひとつは、物語の読者と絵巻の鑑賞者が重なり合う院政期という時代の文化状況に見出せると思われる。同時代の絵画作品で伝わるものは数少ないが、国宝源氏物語絵巻が物語絵巻のひとつの到達点であったことはほぼ間違いないだろう。

国宝源氏物語絵巻では、登場人物から調度品まで、画中のモチーフがことごとく物語の内容に対応し、緊密な画面を構成している。このため、ささやかな

小道具でも、物語の内容によっては、重要な役割を果たしている可能性がある。画面の細部を物語本文とを照らし合わせることは、表現内容の理解につながるばかりでなく、当時の制作者が見る者にどのような鑑賞態度を求めていたのかを探るうえでも手掛かりを与えてくれるだろう。国宝源氏物語絵巻の表現については再発見できる余地が多く残されているように思われる。本稿では一例として「横笛」（挿図1、2）を取り上げ、ここに描かれた襖障子の機能について、ひとつの解釈を試みたい。

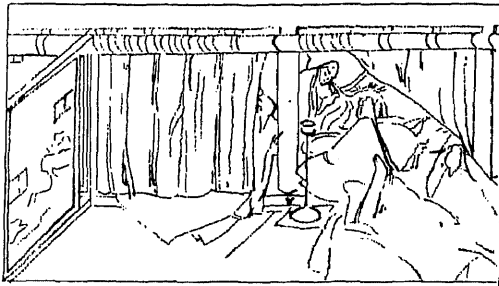
一一

国宝源氏物語絵巻は詞書二十面、絵二十図が現在伝わっているが、物語全体を絵巻に仕立てた当初の規模から比べると、僅か五、六分の一ほどに過ぎない。制作は、物語に通じた統率者のもので、グループ分担制がとられたと想定されている（1）。このなかで、物語の柏木巻（2）から御法巻までを描いた八図の作品は、柏木グループと呼ばれ、最も熟達した絵師が携わったとされている。国宝源氏物語絵巻は、現在保存の目的によって一画面ごとに切り離されているが、この八図はもとは一巻として完成した当時の姿をとどめていたため、場

面選択や画面の配列を知るための貴重な史料でもある。八図は、取材した物語の内容から、主題を担う六図(「柏木1」、「柏木2」、「柏木3」、「鈴虫1」、「鈴虫2」、「御法」と)、挿話的な二図(「横笛」、「夕霧」と)に分けられる。挿話的な二図の方は画面が小さく、横幅が主題を描く他の六図のほぼ半分にあたるが、表現様式においても、主題と挿話では意識した描き分けが見られる(3)。主人公光源氏の栄華を語り継いできた源氏物語は、若菜巻以降暗転し、彼をめぐる世界の破綻が次第に明らかになってゆく。長い物語のなかで殊に複雑な部分を絵画化するために、制作者は思い切った場面選択を行い、主題、挿話という二系統の描き分けを巧みに用いて八図に完結させている。ただ挿話的とされる二図は、主題的な画面に対照的である反面、やはり主題的内容を引きずっている部分も見受けられる(4)。取り上げる「横笛」は、八図中四番目に配され、三図続いた重苦しい場面のおとの挿話として、とりわけ明るい雰囲気醸し出している。



挿図1 国宝源氏物語絵巻「横笛」
縦 21.9×横 38.7cm



挿図2 描きおこし

画面は、夕霧の妻、雲居雁の寝所を、低い視点から見下ろしている。画面や右寄りの奥まったところにいるのは、赤ん坊に乳を含ませるふくよかな雲居雁である。その左手で身をひきがちに子ども様子を見守るのが夕霧で、雲居雁の右手には乳母を筆頭に女房たちが控える。雲居雁の前に燭台が灯り、夜であることを示す。ここに用いられている水平構図は、斜め構図に比べて安定した画面に用いられる傾向があり、登場人物たちの心の齟齬を浮き彫りにする他の緊張した画面とは一線を画す。寝静まった周囲の静けささえ気配に感じられるような整った寝所の中で、雲居雁を頂点に三角形をなす一角だけが賑やかで明るい。

詞書(5)は、赤ん坊がはげしい夜泣きするくんだりから始まっている。さっそく雲居雁は赤ん坊を胸に抱いてあやし出す。夕霧もこれを聞きつけて妻を見舞うと、かねがね夫の浮気を不快に思っていた雲居雁は、「あなたを夜遅くに格子をあげたので、物の怪が一緒に入ってきたのでしようよ」と落葉の宮のもとから夜遅く帰ってきた夫をなじつてみせる。しかし夕霧逆にやんわり言い返されて、言動ともあまりにも主婦じみたわが身を恥じらうのだった。

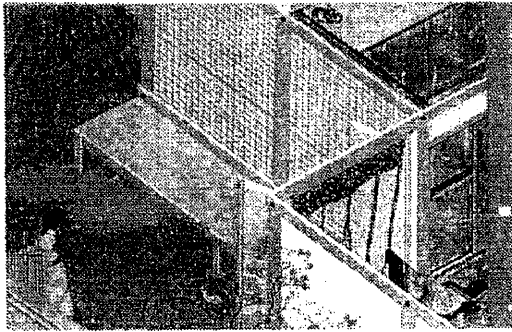
詞書は家庭における夫婦のささやかな波乱を選択し、絵はそれを受けてのはのと明るく描かれている。しかし、気になるのは画面の左方にある襖障子が開いていることである。そこには女房が控えているわけでもなく、ただ暗がりが続いている。まるで、ひとすじの冷気が、この隙間によって舞台にもたらされているように見える。

襖障子には、唐絵らしき断崖と水辺の風景が描かれて、上方には色紙もある。同じような絵は画面の右の襖障子にも認められる。両端の障子の山水風景は、室内画面にささやかな変化を与えつつ全体をまとめる役割を果たしているが、左側の襖障子には開いた方の障子にも丁寧な風景が描き込まれ、この図柄の不連続が襖障子の開け閉めをいっそう目立たせているようでもある。国宝源氏物語絵巻の室内場面において比較できる好例は見当たらない。だが無駄のない画

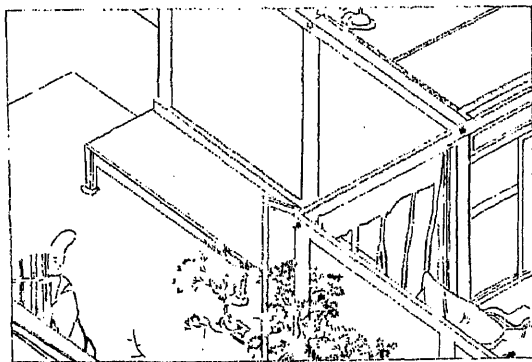
面構成であることは「横笛」も例外ではなく、何より画面の明暗をつなげるような襖障子の描き方から、これが何らかの意味を担っているように思えてならない。そこで詞書ではなく、もう少し範囲を広げ、この場面の前後を含めた物語本文の該当箇所を参照することによって、襖障子の役割を考察する。

二

やまと絵において、開いた戸障子は、描かれた人物の軌跡を示すと解釈するのが第一義だろう。物語絵巻に類例を求めると、和泉市久保惣記念美術館蔵伊勢物語絵巻の「くたかけ」（挿図3）（挿図4）がある。この作品は十四世紀初頭の制作と考えられており、時代が下っているという難はあるが、古風な表現法を一面でとどめているために、かえって古い時代の稚拙な絵巻より参考になる。



挿図3 和泉市久保惣記念美術館蔵伊勢物語絵巻「くたかけ」(部分) 縦30.6×49.8cm



挿図4 描きおこし

男が早々に立ち去って行く場面だが、ここでは右の障子が開いた状態で描かれている。そこから、この男が一夜を過ごした右奥、上方の部屋を出て、御簾を抜けて出たことが鑑賞者に看取できるようにになっている(6)。

「横笛」でも同様に考えて、夕霧が赤ん坊の泣き声を聞きつけて、左手奥から襖障子を抜けて、妻のもとに参じたと解釈できる。ただしこの場合、夕霧は、画面の左から右に移動したことになるのだが、これは絵巻形式の画面の中では、見る者に何らかの違和感を搔きたてる方向と言わざるを得ない。

十二世紀の信貴山縁起絵巻では、登場人物たちの移動が、右から左へと進む視点の動きにあわせて連続画面形式に効果的に表現されている。この三巻の画面において、描かれたものほとんどは、右から左へと移動する。しかし中には、逆に左から右へと移動するものもある。それは命運上人の法力によって返却された米俵の一群や、天皇のもとへ遣わされた剣の護法で、どちらも法力による移動である。つまりこの作品においては、視線の流れと逆方向の動きは、通常ではないもの、超越した力を意図的に示している。国宝源氏物語絵巻は、一図一図独立した段落形式をとるが、卷子である以上、視線の動きと無関係ではない。そして「横笛」における夕霧の移動は、「家庭的な挿話」(7)であるはずの場面において、多少なりとも非日常的な違和感を搔き立て、鑑賞者の視線を左へといざなうてゆくように思われる。しかし左奥には何も描かれていない。

ところで「横笛」の画面で、乳母は円形の器物を手にしているが、中には白い粒状のものが描き込まれていることが確認できる。詞書には直接対応する説明が見当たらないが、小学館の古典文学全集の物語本文を参照すると「撒米し散らしなどして乱りがはしきに、夢のあはれもさめぬべし」(傍線は筆者)とあり、画中の乳母は、魔除けに白米を撒いて、物の怪を退散させようとしている

ことが分かる。国宝源氏物語絵巻では、源氏物語本文の分量が膨大なので、詞書と図とがきつちり対応するわけではないのだが、この場合、制作者が物語内容を意識して、わざわざ撒米の様子を、画面でも目立つところに描きこんでいる。そして、この風習の分かる鑑賞者なら、場面は物の怪にふさわしい夜であることを、乳母の仕草からすぐに読み取れるのである。

詞書の中には、先ほど引用した小学館古典文学全集の下の部分に対応するように「さはかきゆめのさははれもさめぬ」とある。この夢については後述するが、場面直前に夕霧が見た夢のことである。

画面にも詞書にも、細部に注意を払うと、物の怪や夢という、得たいの知れない非日常的なものの存在が見え隠れする。これだけでも赤ん坊の夜泣きに始まった家庭の一場面と片づけるわけにはゆかなくなる。左から右へ続く襖障子といい、物の怪退散の撒米といい、画面の背後に翳が潜んでいる。それらは、物語に聡い鑑賞者なら、ことごとく察知できるような、画面上の仕掛けなのではないだろうか。

四

物語本文では、「横笛」の場面の直前に、不思議な出来事が語られる。柏木の一周忌も過ぎたこの晩、落葉の宮のもとから帰った夕霧は、夢枕に親友だった柏木の霊を見るのである。柏木は、夕霧のもらいうけた柏木の遺笛について、他に伝えたい人がいると語る。

柏木が笛の継承者に望んだのは、表向きには光源氏の子として育てられている薫である。しかし実際には、柏木が光源氏の正妻である女三宮と通じたことで、生を受けた赤ん坊だった。こうした事情は若菜巻から柏木巻までに綿々と語られており、当絵巻においても、「横笛」をはさむ柏木グループの前半の四図

（「柏木1」、「柏木2」、「柏木3」、「鈴虫1」）は、この事件が引き起こした出来事を場面に描いている。柏木と女三宮の密通は、光源氏に言い知れぬ苦悩を背負わせ、柏木自身も自らの命を失うことになった。薫出生の秘密は、柏木の死後も光源氏、女三宮によって、堅く守られていた。横笛巻に至ってはじめて、柏木の霊の口から第三者の夕霧に実子の存在がほめかされたことになる。横笛という物語の巻の名前は、この笛に由来するが、このことから、物語における夕霧の夢の重要性がうかがえる。柏木の霊の出現は、物語の中で、この場面限りであるが、これだけで柏木の魂は救われることなく、無明の闇をさ迷っていることが、物語上、明らかにされてしまった。密通事件のあまりにも重い後日談である。

このような物語の展開を踏まえて「横笛」画面に戻ると、襖障子を開けたままにしたのは、夕霧の移動が重要なのではなく、夕霧の体験した超日常的な出来事を暗示するため、鑑賞者の注意を左にひきつけようとした工夫と考えられる。仮に襖障子が右手にあつて、同じように開いたままになつていても、左が開いているときのような効果は得られない。それではただの夕霧の通路として見逃されてしまうだろう。画面の中心がやや右寄りで、左に奥行きがあること、夕霧は左に抜ける通路から来たことが相俟って、はじめて鑑賞者の注意をひきつけられるのである。物語中、雲井雁や周囲の女房は、夕霧の見た夢も、密通事件も知らない。画面の表向きの明るさと、しのびよる闇は、夢枕によって事件の暗部にはじめて触れた夕霧の胸中に即した表現と言えるかもしれない。画面の表層と、背後の暗的な内容が、同じくらいの重みをもって制作当初から意識されていたとすれば、「横笛」は、他の主題的な画面にも劣らない、高い表現力に支えられた画面として見なおすことが出来る。

結

「横笛」の襖障子は、物語の時空間を広げる役割を果たし、舞台を左の室内空間へつなげ、鑑賞者の視線をどこまでも続く夜の闇へといざなう。その理由は、物語内容に求められる。つまり、左手奥で起こった出来事、すなわち密通の罪を負い、無明の闇にさ迷う柏木の霊の存在を、直接は描かず、詞書にも触れず、暗示という方法で表して、物語に通じた鑑賞者にほめかすためと考えられる。挿話的な日常の一場面を描いた「横笛」だが、そこに柏木、女三宮の密通がひきおこした悲劇の影を、完全に消し去ってはいない。

柏木グループの悲劇的テーマを三図続けて見てきた鑑賞者は、四図目に現われた「横笛」の親子の姿に、つかの間の安らぎを覚えるのだろう。しかし画面は右から左へ進むにしたがって、暗がりに行き果てる。襖障子ひとつが、物語の時空を画面において広げる役割を果たし、主題的内容をこの場面に持ち込んでいるのである。

註

- (1) 佐野みどり『じっくり見たい源氏物語絵巻』小学館2000、2に詳しい
- (2) 混乱をさけるため、絵巻画面の名称には「」をつけ、物語の巻名は、〇〇巻とする。
- (3) 秋山光和「源氏物語絵巻の情景選択法と源氏絵の伝統」(『平安時代世俗画の画法』昭和三十九年三月、吉川弘文館)。
- (4) 稲本万里子「源氏物語絵巻」の情景選択に関する一考察—早蕨・宿木・東屋段をめぐって—美術史・2000・10などに指摘がある。
- (5) 対応する詞書は次の通り

このちこきみいたくおひえてな
いたまうてつたみなとをしたま
はめのともうへのおきいてさは
きたまふつふつとこえうつくしき
御むねをあけたまひてしろく
うつくしき御ちのかはらなるをこ

- (6) 秋山光和「和泉市久保惣記念美術館蔵伊勢物語絵巻について」
 - (7) 秋山氏前掲論文(註1参照)
- ろをやりてくくめなくさめたまふ
ちこきみもをかしくうつくしき
きみなれはおとこきみもおきい
たまひていかなりつることそなの
たまふさはしきゆめのさあはれ
もさめぬ女きみいまめかしき御
ありきにあくかれたまひてよふか
き御つきめにてにれいのものけ
などのいりきたりつるならむとい
とわかきかをしてかしこたちう
ちわらひてあやしものものけの
しるへやまろかうしあけすはみ
ちなくてけにえいりこさちまし
あまたの人のをやになりたまふまに
おもひやりふかくものはのたまひ
たりとてえみやりたまへるまみの
はつかしければさすかにもものた
まはすいてたまひねみくるしとて
あきらかなるほかけをはちたまへり
にくからす